



$$\begin{array}{r} 2 \\ 0.5 \overline{) 1.4} \\ \underline{10} \\ 4 \end{array} \quad \begin{array}{r} 2 \\ 0.5 \overline{) 1.4} \\ \underline{10} \\ 4 \end{array}$$

④ ← → ④
あまりがちがう

〈くめあて〉あまりの求め方を考えよう

調べ方

- 実物のリボンで調べる
- 確かめの計算(検算)で調べる



[確かめの計算(検算)考えたグループ]

$$0.5 \times 2 + 4 = 5 \leftarrow \text{わられる数にならない}$$

$$0.5 \times 2 + 0.4 = 1.4 \leftarrow \text{わられる数になる}$$

〈まとめ〉あまりを求めるときに大切なこと

- ・確かめの計算であまりの大きさを確かめること

$$\begin{array}{r} 2 \\ 0.5 \overline{) 1.4} \\ \underline{10} \\ 4 \end{array}$$

- ・もとのわられる数の小数点とそろえる
- ・もとのわられる数の小数点をおろす

1 指導内容(新学習指導要領解説編から)

小学校算数科より
余りの大きさについて理解すること。

2 本時のねらい

被除数や除数、商と余りの関係に着目し、小数の除法での余りの大きさを捉え直すことを通して、余りを求める。

3 「深い学び」の鍵となる「見方・考え方」を働かせるための発問の意図

引 【「見方・考え方」を引き出す発問】
余りの表し方に違いがあるのはなぜかという疑問や興味を持たせていくようにする。

鍛 【「見方・考え方」を鍛える発問】
小数の筆算の計算や除法の検算の式から、小数の除法の余りの求め方に気付かせていくようにする。

4 「主体的な学び」・「対話的な学び」の重点

【対話的な学び】
課題解決の方法(実物を使って考える方法と検算で考える方法)が同じグループを作り、協働で考える活動を設け、正しい余りについて追求できるようにする。

5 学習過程

段階	主な学習活動と予想される児童の反応	指導上の留意点 口評価の観点【評価方法】
導入 10分	<p>1 小数÷小数(余りあり)の計算をする。</p> <p>2 本時のめあてを知る</p> <p>(1) 計算を発表する</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>C1 商は小数第一位の位に2が立ちます。余りは0.4です。</p> <p>C2 私は余りが4になりました。</p> <p>C3 私も余りは0.4と求めました。</p> </div> <p>(2) 課題を見いだす</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>T 引 どうして余りの数が違うのでしょうか。[引①]</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>C4 0.4と求めたのか分からないな。</p> <p>C5 これまでの余りの求め方だと4になる。</p> <p>C6 小数の計算だから、余りの求め方に違いがあるのでは。</p> <p>C7 小数点の位置に何か秘密がありそう。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・1.4÷0.5の計算を小数第一位まで計算し、余りも求めるよう指示する。 ・隣同士で計算について説明させる。 ・余りが4と0.4になった計算を発表させ考えさせていく。 ・発問した後、児童に自由に発言させ、板書する。

	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">〈めあて〉あまりの求め方を考えよう</p>	
展 開 30 分	<p>3 調べ方を考える</p> <p>T { あまりが4なのか0.4なのかを調べるために、どんな方法が考えられますか。</p> <p>C 8 1.4mのひもを0.5mずつ分けて、余った長さを図ってみれば確かめられます。</p> <p>C 9 検算をすれば、確かめられます。</p> <p>4 グループで課題解決する 【実物を使って考えるグループ】</p> <p>C 10 1.4mのひもを0.5mずつ切っていきましょう。</p> <p>C 11 0.5mは50cmですね。</p> <p>C 12 余りのひもの長さを測ると40cmでした。</p> <p>C 13 40cmをmに直すと、0.4mですね。</p> <p>【検算で考えるグループ】</p> <p>C 14 かけられる数=かける数×商+余りの計算を使って考えよう。</p> <p>C 15 $0.5 \times 2 + 4 = 5$になります。</p> <p>C 16 $0.5 \times 2 + 0.4 = 1.4$になります。</p> <p>C 17 どちらが正しいか分かりました。</p> <p>5 全体で考えを交流する</p> <p>C 18 実際にひもを0.5mずつ切っていくと、余りの長さは0.4mになりました。</p> <p>C 19 余りは4ではなく、0.4が正しいことが分かりました。</p> <p>C 20 検算の式に、4と0.4のそれぞれを当てはめて計算しました。</p> <p>C 21 余りが4だとかけられる数が5になります。</p> <p>C 22 余りが0.4だと、かけられる数が1.4になります。</p> <p>C 23 余りが0.4だと分かりました。</p> <p>T { 鍛 余りを求めるときに大切なことは何でしょう。 [鍛②]</p> <p>C 24 余りがわる数より小さくなっているかを確認することです。</p> <p>C 25 余りの大きさを確かめるときは、検算をすることです。</p> <p>C 26 小数点の位置がわられる数のもとの小数点の位置と同じにして、縦にそろえてうつことです。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">〈まとめ〉検算で余りの大きさを確認する。わられる数の小数点とそろえて下ろしてうつ。</p> <p>6 適用問題 に取り組む</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 同じ調べ方を選んだ児童同士のグループを作らせる。 • 1.4mのひもを準備しておく。 • 0.5m をcmに変換して考えようとしている児童が、正しく変換できているかを確認しながら机間指導を行う。 • グループ内で検算の式がどんな式だったかを確認するよう声掛けする。 • グループごとに発表をさせる。 • 正しく余りが表された筆算の計算を基に、余りを求めるときに大切なことを考えさせ、全体で共有する。 • 筆算の計算の注意点として、小数点の処理の仕方を理解させる。 <p>技能 小数のわり算で、余りを求めることができる。 [ノート]</p>
終 末 5 分	<p>7 本時の学習を振り返る</p> <p>T { 学習で分かったことや気付いたことをノートに書きましょよつ。</p> <p>C 27 余りの大きさに気を付けて、計算したいと思います。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 振り返りを数名に発表させ、学びを共有させる。